



僕らを繋ぐ物

剣輝



パシッ。

振り下ろした虫取り網の中を二人で見つめる。

「ほら！また俺の方が先に獲ったぜ。セミっ！」

セミを手に取り、駿（しゅん）が勝ち誇ったように俺に見せつけてくる。

「それ、アブラゼミだろ？俺はもっとレアなやつを獲ろうとしてんの。」

俺は悔しさからそう言いかえした。

「言い訳するなよ。そういえば、夏休みの宿題終わった？」

駿は獲ったセミを逃がし、そう聞いてきた。

「後、読書感想文が残ってるよ。」

「それだけ！？俺、まだ何もやってないや。。。」

やっぱりね、駿が宿題を終わらせているわけが無い。

「2学期、明後日からだよ。大丈夫？」

「今から宿題手伝ってくれ！...お願いします！」

小学2年の頃から、長期休暇の最後はいつもこういう感じだった。

こうなることは分かっていたし、俺が「良いよ」と言うまでずっと駿がついてくる事も、もう経験していたので、

「分かったよ。」

と言った。すると、満面の笑みで駿は

「ありがとう！」

と言う。

2学期の始業式 -4年生-

駿の宿題を2日で終わらせた。

自分の読書感想文もあったので、結構忙しかった。

でもまあ、無事に二人とも宿題を終わらせて始業式が迎えられた。

今は担任の先生がクラスの出席をとっている。

「葵 彼方くん！」

「はい」

俺の名前だ。

「猪俣 駿くん！」

「はあい！」

次は駿だ。

俺らは出席番号が1番と2番で、学校でもいつも近くにいる。

静岡の伊豆半島にある小学校で、そこそこの田舎だから1学年1クラス。

転校生が来ることも無いので、卒業まではずっと出席番号が隣同士なんだろう。

僕の机の後ろから駿がちょっかいを出してくる。

駿といると毎日が騒がしい。

だけど、一番の親友だ。